

戦国大名から学ぶ『むごい教育』

副校長 野尻 迅人

徳川家康を主人公にした大河ドラマも終末に迫りました。その徳川家康が幼少期、竹千代という幼名のときのエピソードに、今の時代にも参考になるものがあります。

当時竹千代の父は、強力な力をもつ戦国大名今川義元に逆らうことができず、我が子を人質に差し出していました。竹千代を人質にした今川義元は、将来今川家の脅威にならないように、家来に『むごい教育』をするように命じました。“むごい”は漢字で“惨い”と書きます。現在は「残酷である。無慈悲である。ひどい、悲惨だ」という意味で使われています。当時も同様な意味で“むごい”を捉えたであろう家来は、竹千代をひどい目に合わせればよいと考えて、休ませずに厳しい訓練をさせ、ろくな食事を与えない、いわば虐待のような行為を竹千代にしました。

数日後義元が、『むごい教育』はどうなっている？」と家来に確認すると、家来は意気揚々と竹千代に苦痛を与えている状況を報告しました。すると義元は、「それは『むごい教育』ではない！」と激しく家来に怒りました。家来が義元に真意を聞くと、次のように答えました。

竹千代には、贅沢な食事を与え、朝から晩まで美味しいものを好きなだけ食べさせよ。
寝たいと言ったらいつでもいくらでも寝かせてやり、休みたいと言ったら休ませよ。
夏は暑くないように涼しくしてやり、冬は寒くなく暖かくしてやれ。
武術や学問が嫌だというなら、無理にやらせるな。
本人の望むとおりに、何でも与えてやり、好きなことを好きなだけさせて、どんなわがままでも聞いてやれ。

そして、最後にこう付け加えました。

「そうすれば、大概の人間は駄目になる。」

肉体的、精神的に苦痛を感じるような扱いをするよりも、好き勝手やわがまま放題、贅沢三昧を許す、必要以上の甘やかしが『むごい教育』だということです。

現代は戦国時代ではありませんが、自分一人でも生きていける力を身に付けさせ、自立できるようにしていくことが大人の役割であることに、変わりありません。

子どもが嫌いだからといって偏食を許していたら、身体はどうなってしまうのでしょうか。楽しいからと、ゲーム三昧、動画三昧で過ごしていたらどうなってしまうのでしょうか。子どもを将来社会に出し、一人の大人として振舞えるようにするためには、我慢をする心、すぐに結果が出ないことに粘り強く取り組ませる気概、物が無い中で工夫する力を育てるために、意識的に「物分かりの悪い大人」になることも必要だと、このエピソードは伝えていると思います。

ちなみに竹千代は、今川義元の思惑どおりにはならず、学問や武術に勤勉に励みました。幼いながらも自分を律する姿勢に感心した義元は、竹千代を駄目人間にすることを諦め、将来我が子の右腕にすることに方針を変えたということです。徳川家康は江戸幕府を開き、長い太平の世をつくり上げた人物なので、脚色が混じったエピソードだと思われそうですが、多くの人に知ってもらいたいお話です。